

9 その他 (文章の中で漢字を用いる作文指導)(5・6年)

1 はじめに

「高学年なのに、作文を書かせるとすべて平仮名。一年生で習った漢字も使っていない。」「こんな経験があるのでないだろうか。」

だからといって、やっとの思いで自分の思いを綴っている児童に、十分な励ましなどがなく漢字や原稿用紙の使い方まで言い出すと、作文そのものが嫌いになってしまうおそれがある。

そこで、児童に書かせた作文を二つの観点から評価する方法を勧めたい。

2 評価について

漢字を使っていることと、原稿用紙の使い方が正しいことのみを評価

内容はもう一息といったところだが、文字も丁寧に漢字もたくさん使われ、かぎかつこや段落もきちんとしているという作文に出合うことがある。

このような作文は、書き方の面でぜひ評価したい。「漢字Aとか、かぎかつこA、段落A」とか褒めるだけで気を付けるはず。項目を増やさず、漢字を使っているか否かで評価してもよい。

書かれている内容のみを評価

「書くことを苦としない」「楽しみながら書ける」ことを最終目標としているので、「自分の気持ちを正直に綴ったもの」「や」「出来事や場面が読んでいる人の目に浮かんでくるような作文」があれば、児童に紹介する。また、全員にコメントを書いて励ます。

3 作文は教室に掲示して児童の目に触れるようにおく

(例)

作文を書かせるときに用意するものは、B5判の20字×10行の200マスの原稿用紙。(400字詰め原稿用紙を使うよりは、簡単に一枚が埋まる原稿用紙を使わせた方が、たくさん書けたという満足感を児童に与えることができる)。

B5判のクリアファイルを台紙に使用して書かせたものをファイルしていく。それを掲示して児童が互いに見合うことでよさに触れることがねらいである。

行事後の作文でも良い。書く機会を増やしたい。一時間以内に書き終えることを目標とする。

書かれている内容に関して丸の形に変化を与えることで評価しても効果的である(ぐるぐる丸、花丸、花丸に葉っぱを付けたり等)。文字や漢字を一つ一つ直すことはしない。「観点を明確にして励ます」「掲示することで見合う」「回数を重ねる」ことが指導のポイント。